

水辺の猓

長井 寛

雪掘って一菜とせり路の臺

鈍色の鍋蓋の黙木の根明く

天平の蕘寄り添う寒の入

山寺の千のきざはし吊し雛

抗うて風の容ちになる薄氷

鬼遣己がこころを棲み処とす

陽炎に入る機関車の浮遊感

一頭づつ浮雲になる紋白蝶

渦を巻く土耳古コーヒー春愁

産土の貨車を数えている遅日

新刊に腰帯空に桜東風

白夜来て水辺の猓の食む睡夢

大山椒魚邪馬台国の地を揺らす

つばくらめ大言海を越えんとす

道野辺の草のテアラや風信子

大海人皇子幣振る海開き

飛石を踏んで極暑を遣り過ごす

尺取の越すにこせないランズエンド

翡翠の後ろの正面水鏡

ポンポングリア幼子のする逆上り

清廉の水より生るる江戸切子

回り道して知る己が道樞櫃の実

糸子いとこのままの子子子規の庵

秋出水方舟の着く安達太良山

川の水澄み言の葉にある虚実

ラ・フランス骨太の字の手紙受く

豊満な志功の菩薩木守柿

一葉の言霊になる冬もみじ

動うごもすれば鮫鯨やかいだったかもしれぬ

残照の膨らんでゆく寒雀